

海も時代もジャンルをも超えた、新型ミュージックフェスティバル
EAST MEETS WEST 2019が終幕
-公演レポート大公開！-

2019年4月26日(金)~28日(日)に東京国際フォーラム ホールCにて開催した音楽フェスティバル、『SRP Presents EAST MEETS WEST 2019』。時代を築いた大御所から、これから世界を目指す気鋭の若手といった、日米の豪華ミュージシャンたちが1つのステージに集まり共演。様々なアーティストとの「セッション」に注目した新たな音楽フェスティバルが実現した3日間となった。今回は、本公演の様態や裏話などを大公開！



<ミュージックディレクター、ベーシスト>
ウィル・リー (Will Lee)

「“イースト・ミーツ・ウエスト”は僕の夢だった。そして本当に夢がかなったよ！」この気の遠くなるような大プロジェクトを全面的に統率したウィル・リーが軽快な身のこなしを見せつつ、そう笑顔でMCをする。



各日10時間ものリハーサルを重ねる

国籍や文化を超えて東洋と西洋の音楽家たちによる実のある邂逅を求めた3日間全4公演の出演者を選び、演目やアレンジを決めたミュージック・ディレクターは本当に誇らしげ。実は出演者たちには早い段階でウィルから詳細な譜面が送られ、直前の3日間は毎日10時間ものリハーサルを重ねたという。華々しい各3時間にわたる本番の奥には、度を越したミュージック・ラヴァーの熱意と創意が横たわっていたのだ。

ステージを支える豪華 “スーパーバンド”

ウィルがまずこだわったのは、ハウス・バンド。それも日米混在の編成を持つ。**ジェフ・ヤング**と**桑原あい**という二人のキーボード／ピアノ奏者、**ウィル・リー**（エレクトリック）と**鳥越啓介**（アコースティック）という二人のベーシスト、そしてドラマーは大御所**クリス・パーカー**と20代半ばの**山田玲**というお二人。さらにサクソ奏者の**アロン・ヘイク**やトロンボーン奏者の**村田陽一**や**トランペッターの西村浩二**といった管楽器奏者や3人の女性コーラス隊（うち一人はザ・プラン・ニュー・ヘヴィーズの黄金期にフロントに立っていたエンディア・ダヴェンポートだ!）や、様々なスタイルをこなすギタリストの**ニア・フェルダー**……。まさに、日米敏腕奏者たちの十字架。面々による伴奏はいろいろな個性を持つ主役たちを自在に乗せ、“魔法の絨毯”と称するにふさわしい。



ジェフ・ヤング

桑原あい

ウィル・リー

鳥越啓介

クリス・パーカー

山田玲

アロン・ヘイク

村田陽一

西村浩二

ニア・フェルダー

音楽ジャンルを飛び越えたゲストアーティスト陣

- **マイク・スターン** [g]
- **渡辺香津美** [g]

そんな豪華バンドにフィーチャーされる初日最初の出演者は、まさしく“永遠のギター小僧”を地でいくマイルス・デイヴィス・バンド出身の**マイク・スターン**。彼は颯爽と今のコンテンポラリー・ジャズの肝を表出した。一方、日本代表のギタリストとなる**渡辺香津美**はかつてTVCFにも用いられた名曲「ユニコーン」他を新編曲のもと観客に問い、彼はマイク・スターンのステージにも飛び入りして日米2大ギタリストの共演を実現させた。



マイク・スターン

渡辺香津美



ランディ・ブレッカー

アダ・ロヴァッティ

- **ランディ・ブレッカー** [tp]
- **アダ・ロヴァッティ** [sax]

ジャズ・フュージョン勢ではトランペッターの**ランディ・ブレッカー**とテナー・サクソ奏者の**アダ・ロヴァッティ**夫妻の演奏も受け手を沸かせた。実はマイアミ在住だったウィルがNYで活動するきっかけを作った恩人がランディであり、ランディと弟の故マイケルが1970年代中期に結成したザ・ブレッカー・ブラザーズにはウィルやドラマーのクリス・パーカーも参加。「サム・スカンク・ファンク」ほかザ・ブレッカー・ブラザーズの曲を中心に紐解いた彼らのセットは、まさにエヴァーグリーンな表現の書き換えの面白さを教えた。

- **日野皓正** [tp]
- **矢野顕子** [vo/pf]

それから、トランペッターの**日野皓正**とシンガー／ピアニストの**矢野顕子**という日米を股にかけたワールド・クラスの出演者の参加もまた EAST MEETS WEST 2019 の趣旨に合致する。代えのない秀でた音楽性ととも、二人のウィットとサービス精神にあふれた振る舞いもまた超一流。こんなに大きな編成のもと開かれる矢野顕子表現は貴重であったし、日野皓正は意気盛んにランディ・ブレッカーの出番にも飛び入りした。



日野皓正

矢野顕子



藤巻亮太



白井ミト

- 藤巻亮太[vo/g]
- 白井ミト[vo/g/key]

一方、藤巻亮太と白井ミトというウィルのお眼鏡にかなった日本人シンガー・ソングライターもそれぞれに登場。洋楽センスを見事にJ-POP表現に昇華させる藤巻、R&B他アーシーな米国の音楽語彙を巧みに日本語曲に転化させた白井とともに、東西演奏陣のサポートのもと自らの持ち味を鋭意演出。今回、ウィルは耳のこえた日本のリスナーに才ある同胞を紹介したいという意図も持っていた。

●桑原あい[pf]

また、ハウス・バンドの一員をこなすとともに、個人アーティストとして表に立ち確かな手腕をアピールしたのが、ウィルとスティーヴ・ガッドとのトリオでレコーディングやツアーもしている伸び盛りピアニストの桑原あい。クインシー・ジョーンズからも高評を受ける彼女だが、これからより海外に出る存在であるのを、その好演は伝えるものだった。



桑原あい

ソウル・レジェンド“サム・ムーア”の熱唱

そして、初日と最終日の公演のトリを飾ったのが、レジェンダリーなソウル歌手であるサム・ムーアだ。1935年生まれである彼は椅子に座って歌ったが、ソウルの魅力を直裁に伝えるハリある歌声は訴求力抜群。彼を世界的な存在としたサム&デイヴ時代の「ホールド・オン」や「ソウル・マン」を含む熱唱は観客の心を見事に射抜いた。実は彼、腰を痛めており今回のオファーを断っていたが、ウィルの熱意にほだされ出演を決めたという。最後のジョン・レノン曲「イマジン」を歌い終わると、観客はスタンディング・オベーション。まさしく“ソウル大使”たる彼の出演は、EAST MEETS WEST 2019 のハイライトだった。



ラストを飾るのは有名なジャズナンバー「フリーダム・ジャズ・ダンス」

各公演の最後は出演者たち全員による軽快な音楽で有名なジャズナンバー「フリーダム・ジャズ・ダンス」をソロを回しながら演奏。それこそ海を挟んだ音楽家演奏者たちによる“プレイ・グラウンド”の具現ではなかったか。EAST MEETS WEST 2019 は文字通りの東西の音楽家たちの融合の可能性や興味深を示すだけでなく、ジャズからソウルやJ-POPまでを横断するリベラルな音楽享受の素敵さや異なる世代が繋がることの重要性を浮き彫りにしていたのは疑いがない。

また、名手たちが思うまま重なり合うライブ・ミュージックの醍醐味が鮮やかに提示されてもいたはずだ。秀でた音楽観や豊かな人間性のもとそれらを成就させたウィルの頭のなかには、きっと次回への様々な展望が芽生えているに違いない。

(文：佐藤英輔、写真：©RyoHiguchi)

最新情報は各SNSでも配信中！

【オフィシャルHP】 <http://emw.sunrisetokyo.com/>

【オフィシャルSNS】

Twitter : @srpEMW (<https://twitter.com/srpEMW>)

Instagram : @srp_eastmeetswest(https://www.instagram.com/srp_eastmeetswest/)

Facebook : <https://www.facebook.com/eastmeetswest2019.srp/>

【お問い合わせ先】

株式会社サンライズプロモーション東京 広報宣伝部

担当：磯貝 雄一、榊原 舞

TEL : 03-5772-9356(直通) MAIL : isogai-y@sunrisetokyo.com(職員)